全学教育科目に係る授業アンケートにおける
エクセレント・ティーチャーズ

（令和6年度）

高等教育推進機構では平成２４年度から、全学教育科目に係る授業アンケート結果において、総合評点の値が上位となった専任教員のうちから次項選定基準に基づき、「全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャー」として選定し、所属・職名・氏名・担当授業科目・総合評点をホームページで公表することとしている。

また、エクセレント・ティーチャーのうち、各授業科目区分の最上位者から、当該授業科目の目的・内容・実効上の取組・工夫等について報告を得て紹介する。

教員から報告された授業への取組・工夫等については、学生へのフィードバックを目的として、また、教員のＦＤや教員相互の授業参照資料として公表する。

なお、平成２３年度まで評価室が実施してきた授業アンケート結果の公表に至る検討の経緯や公表方法に関する考え方等は、平成１５年度年次報告書（第１部第２章『学生による「授業アンケート」について』）や同別冊「学生による授業アンケート結果」(PDF)を参照願いたい。

なお、授業アンケートは学生の視点からの評価であり、この指標のみが授業の質や教員の教育能力を示すものではないことを付言しておきたい。

全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーの選定基準

１．対象者

対象年度に開講した全学教育科目において、学生による授業アンケートを実施した授業科目を担当する本学の教員※とする。

ただし、アンケート提出者が９名以下の授業科目を担当する者は除く。

※シラバスに掲載されている責任教員・担当教員。ただし非常勤講師は除く。

２．選定方法

学生による授業アンケート結果において、文系・理系区分及び授業科目区分ごとに総合評価の値が上位の者から、原則、別表①の選出数に基づき全学教育科目におけるエクセレント・ティーチャーズとして選定する。ただし、総合評点（主要設問の評定値の平均）の値が 4.00 未満の者は除く。

なお、文系・理系区分は、責任教員の所属部局により別表②の「文系・理系区分」に基づき区分することとし、授業科目区分は、国立大学法人北海道大学全学教育科目規程（平成７年４月１日海大達第２号）第２条に規定する科目により区分することとする。

【別表①：選出数】

		一般教育演習	総合科目	主題別科目	共通科目	外国語科目	外国語演習	基礎科目	日本語科目
文系	15	2	1	4	1	3	3	1	
理系	15	4	1	1	1	2		6	

【別表②：文系・理系区分】

〈文系部局〉

文学研究院	観光学高等研究センター	産学・地域協働推進機構
教育学研究院	アイヌ・先住民研究センター	高等教育推進機構
法学研究科	社会科学実験研究センター	大学院教育推進機構
経済学研究院	大学文書館	総合 IR 本部
メディア・コミュニケーション研究院	埋蔵文化財調査センター	安全衛生本部
公共政策学連携研究部	学生相談総合センター	
スラブ・ユーラシア研究センター	国際連携研究教育	

〈理系部局〉

理学研究院	先端生命科学研究院	北極域研究センター
医学研究院	低温科学研究所	広域複合災害研究センター
保健科学研究院	電子科学研究所	One Health リサーチセンター
歯学研究院	遺伝子病制御研究所	数理・データサイエンス教育研究センター
薬学研究院	触媒科学研究所	総合博物館
工学研究院	人獣共通感染症国際共同研究所	保健センター
農学研究院	情報基盤センター	総合イノベーション創発機構
獣医学研究院	アイソトープ総合センター	サステイナビリティ推進機構
水産科学研究院	量子集積エレクトロニクス研究センター	北海道大学病院
情報科学研究院	北方生物圏フィールド科学センター	
地球環境科学研究院	環境健康科学研究教育センター	

３．その他

（１）上記２のエクセレント・ティーチャーズのうち、各授業科目区分の最上位者から、当該授業科目の目的・内容、実行上の取組・工夫等についての報告を得て紹介する。ただし、過去３年間に紹介したエクセレント・ティーチャーは除く。

（２）一人の教員が複数の授業科目区分で最上位となった場合は、全ての授業科目について報告を得て紹介する。ただし、対象者の希望により、報告・紹介する授業科目をいずれか一つのみとすることができる。

（３）上記（１）、（２）のただし書きに該当する場合、及び退職等で報告を得られない場合は、次点のエクセレント・ティーチャーから報告を得て紹介する。

（４）上記２のエクセレント・ティーチャーズのうち、各授業科目区分の最上位者を「ベスト・エクセレント・ティーチャー」とし、高等教育推進機構長より表彰する。

全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーズ（令和6年度）

	区分内順位	文系理系	授業科目区分	総合評点	※責任教員所属部局名	※責任教員職名	責任教員	担当教員（担当教員所属部局）	授業形態	必修選択	授業科目名	講義題目名	提出枚数	備考
★	1	文系	一般教育演習	4.90	教育学研究院	准教授	伊藤　崇		演習	選択	一般教育演習（フレッシュマンセミナー）	北海道の居酒屋の真髄を探る	10	
	2	文系	一般教育演習	4.88	高等教育推進機構	教授	鄭　惠先		演習	選択	一般教育演習（フレッシュマンセミナー）	日本語のコミュニケーションスタイル	21	
	3	理系	一般教育演習	4.81	北方生物圏フィールド科学センター	教授	岸田　治		演習	選択	一般教育演習（フレッシュマンセミナー）	南紀熊野の自然と人々のくらし・初春編	10	
	4	理系	一般教育演習	4.78	農学研究院	教授	小関　成樹		演習	選択	一般教育演習（フレッシュマンセミナー）	食べ物が食卓に届くまで	10	
	5	理系	一般教育演習	4.76	地球環境科学研究院	教授	渡邉　悌二		演習	選択	一般教育演習（フレッシュマンセミナー）	北海道の自然と人	10	
	6	理系	一般教育演習	4.73	北方生物圏フィールド科学センター	准教授	岸田　治	笠田　実（北方生物圏フィールド科学センター（雨龍））	演習	選択	一般教育演習（フレッシュマンセミナー）	南紀熊野の自然と人々のくらし・夏期編	12	
★	1	文系	総合科目	4.54	高等教育推進機構	教授	亀野　淳	川上　あき（高等教育推進機構）	講義	選択	特別講義	大学と社会－先輩からの熱いメッセージ－秋	96	2021執筆
	2	理系	総合科目	4.35	水産科学研究院	教授	栗原　秀幸	酒井　隆一（大学院水産科学研究院） 細川　雅史（大学院水産科学研究院） 山崎　浩司（大学院水産科学研究院） 岸村　栄毅（大学院水産科学研究院） 安藤　靖浩（大学院水産科学研究院） 藤田　雅紀（大学院水産科学研究院） 別府　史章（大学院水産科学研究院） 熊谷　祐也（大学院水産科学研究院） 丸山　英男（大学院水産科学研究院） 高谷　直己（大学院水産科学研究院） 辺　　浩美（大学院水産科学研究院） 沖野　龍文（大学院地球環境科学研究院） 小野田　晃（大学院地球環境科学研究院） 清水　宗敬（大学院水産科学研究院）	講義	選択	環境と人間	マリンバイオ資源の化学的機能と利用	40	
★	1	文系	主題別科目	4.91	メディア・コミュニケーション研究院	教授	中川　理		講義	選択	社会の認識	コンサルティング入門Ⅱ 発想転換の方法論	29	2022ベスト
	2	文系	主題別科目	4.78	法学研究科	助教	中田　翔太		講義	選択	社会の認識	刑法学への入口	12	
	3	文系	主題別科目	4.75	メディア・コミュニケーション研究院	教授	中川　理		講義	選択	社会の認識	コンサルティング入門Ⅰ 論理思考の身につけ方	24	
	4	文系	主題別科目	4.68	教育学研究院	教授	松田　康子		講義	選択	思索と言語	手話と聴覚障害	15	2023執筆
	5	理系	主題別科目	4.55	医学研究院	教授	高橋　誠		講義	選択	社会の認識	医学概論・医学統計学・医学史概論Ⅰ（医学概論）	54	
★	1	文系	共通科目	4.33	教育学研究院	准教授	崎田　嘉寛	山仲　勇二郎（大学院教育学研究院）	講義	選択	体育学B 講義		54	
	2	理系	共通科目	4.19	情報科学研究院	教授	田中　章		講義	選択	統計学		38	
★	1	文系	外国語科目	4.66	メディア・コミュニケーション研究院	准教授	ブンティロフ ゲオルギー		講義	必修	ロシア語Ⅰ		22	
★	1	文系	外国語科目	4.66	メディア・コミュニケーション研究院	准教授	Paul Spicer		講義	必修	英語Ⅰ		18	
	3	文系	外国語科目	4.61	メディア・コミュニケーション研究院	教授	金　ソンミン		講義	必修	韓国語Ⅰ		41	
★	1	文系	外国語演習	4.76	文学研究院	教授	佐野　勝彦		演習	選択	英語演習	中級：英語で学ぶ論理学とその歴史	23	
	2	文系	外国語演習	4.75	メディア・コミュニケーション研究院	准教授	LADREYT ALEXIS CLAUDE		演習	選択	フランス語演習	C1：Level	21	
	3	文系	外国語演習	4.73	文学研究院	准教授	コーカー　ケイトリン クリスティン		演習	選択	英語演習	中級：身体表現論	24	
	4	理系	外国語演習	4.46	医学研究院	助教	伊　敏		演習	選択	英語演習	中級：医学の英文献を読む	14	
	5	理系	外国語演習	4.45	理学研究院	教授	松王　政浩		演習	選択	英語演習	中級：科学ジャーナリズムの英語	25	
★	1	文系	日本語科目	4.96	高等教育推進機構	講師	近藤　弘		講義	必修	日本語Ⅱ	上級表現（プレゼンテーション）	11	
	2	理系	基礎科目	4.60	工学研究院	准教授	久保田　浩司		講義	必修	化学Ⅱ		38	2022、2023ベスト 2021執筆
	3	理系	基礎科目	4.48	地球環境科学研究院	准教授	内海　俊介		講義	必修	生物学Ⅱ		59	
	4	理系	基礎科目	4.47	地球環境科学研究院	准教授	川口　俊一		講義	必修	化学Ⅰ		33	
	5	理系	基礎科目	4.45	地球環境科学研究院	准教授	河谷　芳雄		講義	必修	地球惑星科学Ⅱ		109	
	6	理系	基礎科目	4.44	理学研究院	教授	木村　敦		講義	必修	生物学Ⅰ		44	2023執筆
	7	理系	基礎科目	4.41	理学研究院	講師	丸田　悟朗		講義	必修	化学Ⅰ		23	

★　：ベスト・エクセレント・ティーチャー
　　：「授業内容・工夫等」執筆依頼者

※「所属部局名」「職名」は、令和6年度授業実施時点のものを記載

◎授業科目区分毎の授業アンケート実施者数（延べ）

一般教育演習	129	名
総合科目	41	名
主題別科目	112	名
共通科目	37	名
外国語科目	166	名
外国語演習	227	名
基礎科目	197	名
日本語に関する科目	9	名
計	918	名

一般教育演習（ﾌﾚｯｼｭﾏﾝｾﾐﾅｰ）

「北海道の居酒屋の真髄を探る」

教育学研究院　伊藤　崇

■シラバス

授業の目標 Course Objectives

居酒屋の歴史は江戸時代に始まる。飯野亮一氏の『居酒屋の誕生』（筑摩書房）によれば、酒を売る酒屋で飲むことを居酒（いざけ）と言い、飲ませる酒屋は居酒屋（いざけや、後には「いざかや」が一般化する）と呼ばれた。それとは別に料理を提供する店として煮売茶屋もあり、そこでも酒を飲むことができた。2つの境界が曖昧になり、料理と酒を提供する店が居酒屋と称されるようになったのである。

このような居酒屋が北海道に持ち込まれた正確な時期は定かではない。和人による統治がなされていた渡島半島には江戸時代からすでに酒蔵があったようだ。とすると、北海道にも明治以前から居酒屋の形態が存在していたとは推測できる。

明治期にビール醸造が札幌で開始。炭鉱の開発と衰退。大規模な漁業と酪農の展開。そしておよそ 200 万人が住む札幌市の拡張。北海道という土地において起きたこれら様々な出来事の裏で、居酒屋とそれに関連する文化がどのように発展してきたのか。それはおそらく北海道という土地を巡る人々の活動を反映したものであったはずだ。過去から現在に至る北海道の居酒屋の真髄を探ることを通して、この大地の本質にせまることが本演習の目的である。

到達目標 Course Goals

居酒屋とは何かを説明できる

居酒屋を巡る文化を通して北海道の歴史と特質を説明できる

居酒屋文化を楽しむことができる

授業計画 Course Schedule

このコースは教員やゲスト講師による講義、フィールドワーク、ワークショップ形式などから構成される。

講義スケジュールは未定である。おおよそ以下の事項を網羅する予定である。

・日本の居酒屋文化とは：太田和彦と吉田類に学ぶ

・北海道の居酒屋の現在

・北海道の歴史と居酒屋の歴史

・道内の地域差とそれを反映した居酒屋文化

・つぼ八と学生居酒屋文化

・フィールドワーク：札幌の居酒屋探訪

・居酒屋店主の流儀：店主へのインタビュー

・ワークショップ：居酒屋アルバイトのスキルを学ぶ

・酒とつきあうための方法

成績評価の基準と方法 Grading System

最終レポートで評価する。演習中に出す課題はすべて提出することが評価を受ける条件となる。

■授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

本演習の目的は、北海道という土地を歴史的・地理的観点から眺める訓練を行うことであった。本学の１年生の約７割が道外出身である現状を鑑みるに、自らが新たに暮らし始める土地について知ることは必須の教養であると考えられたためである。

北海道の居酒屋という場やそれが置かれた状況を知ることは、北海道を多角的に知る上で有利であると思われた。居酒屋で提供される酒や料理には、北海道独自のものも多い。その由来を知ることは歴史を知ることであり、食材の特質を知ることは自然環境を知ることである。さらに、居酒屋を訪れる客を知ることは社会の一つの側面を知ることであり、そこで働く人を知ることは労働者としての自分を振り返る機会となる。

このような考えのもとで週ごとに決められたテーマに沿った多様な活動が用意され、受講者たちはそれらに真剣に従事した。受講者が参加した活動の一部を下記に示す。

① 北海道最大の繁華街すすきのを歩き、居酒屋を中心とした飲食店の多様性を知る。
② 居酒屋を含む飲食店での働き方をモデルとして、労働者の権利について知る。
③ 札幌で最も古い居酒屋の一つを実際に訪問し、食事をする（アルコールは厳禁）。
④ 北海道における、下記の酒・食材・料理について各自で調べ、発表する。それらは、日本酒、ビール、甲類焼酎、ウイスキー、ワイン、鰊、やきとり、ラーメンサラダ、牡蠣、羊肉（ジンギスカン）であった。
⑤ 北区民センターの調理室にて、「北海道の居酒屋の真髄」を表現する料理を受講者自身で作り、みなで食べる。

② 授業実施上の取組・工夫

本演習を実施するに際して、下記の３つの工夫を行った。

① 「本物」に触れること：　ネットから自在に情報を集めることの可能な現在、表面的な知識を大学で伝達する意味はない。繁華街を実際に歩き、居酒屋に足を踏み入れることが重要である。また、酒や食材について調べたことを受講者が発表する際には、教員自身もその週のテーマ食材を持ち込み、みなで飲食する工夫も行った。
② 多様な人に関わってもらうこと：　担当教員１人ではリソースに限界がある。本演習では学内外の方に多数ご協力をいただいた。特に、曾根輝雄先生（農学研究院、北海道ワイン教育研究センター長）、川村雅則先生（北海学園大学）、上平崇仁先生（現・立命館大学）には演習にご参加いただき、レクチャーまでしていただくことができた。この場をお借りして、改めて感謝申し上げます。
③ 振り返りを毎週行うとともに制作物を作成すること：　ほぼ毎週にわたり、教員が演習の振り返りをまとめ、文章化して受講者に配布した。受講者自身に執筆してもらうこともあった。最終的に『居酒屋の真髄通信』という ZINE にまとめて自費出版した（写真参照）。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・北海道の居酒屋の歴史などについて深く知ることが出来た。
・生徒と先生が相互に発言し合うことで理解を深めることができた点。
・毎回楽しかった最高だった
・料理がすべておいしかった。
・とても楽しかった点
・道外出身のため北海道の食文化をあまり知らなかった私にとっては、これからの北海道の食生活を楽しむために充実した内容でした。先生の太っ腹さに乾杯です。ありがとうございました！
・とても楽しく、学ぶことも多い最高の授業でした！！ありがとうございました！！！！
・教員の教育に対する姿勢や、居酒屋という身近なテーマに対する？熱意が感じられた点。

環境と人間

「マリンバイオ資源の化学的機能と利用」

水産科学研究院　栗原　秀幸

■シラバス

授業の目標 Course Objectives

地球表面の約 70%を占める海洋に存在する豊富な生物は、陸上の動植物資源にない環境で育つため、食料資源・生化学資源として優れた特性をもつ成分や多様な機能を有することがわかってきました。分子レベルでこれら成分、機能特性、よりよく利用するための化学的・生化学的アプローチを理解することは、食品産業、工業、医薬品等への応用、人類の幸せにつなぐ活用を知ることになります。本講義では、再生産可能なマリンバイオ資源の利用と人間生活との関わりについて学び、マリンバイオ資源の重要性を認識することが目標です。

到達目標 Course Goals

マリンバイオ資源に機能特性と高度利用技術、未利用資源や副生物の有効利用、環境保全に対応する新技術などを理解し説明できるようになります。これらの知識の組み合わせにより、現状のマリンバイオ資源の活用法を把握し、将来の活用法を論じることができるようになります。

授業計画 Course Schedule

次に示すテーマについて、オムニバス形式で講義します。講義の順序等は初回の講義のガイダンスで説明します。

栗原秀幸　教授　「(初回)イントロダクションと水産物の多様な利用」

(以降　順不同)

安藤靖浩　准教授　「水産生物の脂質の構造・組成と分析」

沖野龍文　教授　「海洋生物のケミカルシグナル」

小野田晃　教授　「水産資源廃棄物の有効利用−タンパク質工学と合成化学からのアプローチ」

岸村栄毅　教授　「水産廃棄物の再資源化−未利用生物とその内臓」

熊谷祐也　准教授　「水産資源の糖類と酵素」

酒井隆一　教授　「海洋生物に薬を求めて」

清水宗敬　教授　「水圏生物の生化学的適応」

高谷直己　助教　「マリンカロテノイドの健康機能」

藤田雅紀　准教授　「遺伝資源としての海洋生物」

別府史章　准教授　「水産資源と未病」

細川雅史　教授　「水産物のおいしさと呈味成分」

丸山英男　准教授　「バイオマス・バイオプロダクトの分離操作」(オンライン予定)

山崎浩司　教授　「水産資源の利用と微生物」

吉川修司　博士　「魚醤油の発酵生産技術」

辺浩美　助教　「海洋生物由来の生理活性タンパク質」

成績評価の基準と方法 Grading System

各回の講義では、受講確認を兼ねて、指定した課題についての小論文や小テストを課します。各回の評点の総合

点から成績評価を行います。相対評価を原則とし、「A+」は履修者数の上位5%以内を目安とします。ただし、6回以上欠席した場合には、成績評価の対象外とします。

■授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

本授業は１年次第１学期に総合講義「環境と人間」として開講しています。本学の教育理念である「実学の重視」の理解を深めるために、人間との関わりがあって産業が成り立つこと、水産業や海洋生物成分の機能を知り、人間に利活用されていることを内容の中心に据えています。とかく「水産業（漁業）」に関連する「水産学」は「魚の取り方を勉強するのか？」と周りに言われがちです。本授業は、より人間（消費者）に近い視点から、水産物や海洋生物の成分がどのように食品や医薬・化学品として利活用され人間の生活に役立つのかを様々な角度から教授しています。多くの学生が本授業を１年生第１学期に履修することから、学んだ知識をいかすために今後の４年間で「どのような知識を学び、考え方を身につけなければならないのか」を想起させる内容を意識しています。

そこで本授業の目的は以下の様に掲げています。海洋に生育する豊富な生物は、陸上の動植物資源にはない環境で育つため、食料資源・生化学資源として優れた特性をもつ成分や多様な機能を有することがわかってきました。分子レベルでこれら成分、機能特性、よりよく利用するための化学的・生化学的アプローチを理解することは、食品産業、工業、医薬品等への応用、人類の幸せにつなぐ活用を知ることになります。本講義では、再生産可能なマリンバイオ資源の利用と人間生活との関わりについて学び、マリンバイオ資源の重要性を認識することを挙げています。「(初回）イントロダクションと水産物の多様な利用」のあと、食品に関連する内容として、水産生物の脂質の構造・組成と分析、糖類と酵素、マリンカロテノイド、水産資源と未病、おいしさと呈味成分、微生物、魚醤油の発酵生産技術などの内容で講義を行っています。加えて、医薬品など広く化学品に関する内容として、海洋生物のケミカルシグナル、水産資源廃棄物の有効利用-タンパク質工学と合成化学からのアプローチ、「水産廃棄物の再資源化、海洋生物に薬を求めて、生化学的適応、遺伝資源としての海洋生物、バイオマス・バイオプロダクトの分離操作、生理活性タンパク質という内容の講義を行っています。このように海洋生物成分の利活用に関して幅広い視点から授業を行っています。

② 授業実施上の取組・工夫

本授業は水産学部資源機能化学科を担当する 13 名の他に地球環境科学研究院の 2 名の教員と、北海道立食品加工研究センター食品開発部長 1 名がそれぞれの分野から幅広い内容で授業を担当しています。オムニバスの授業内容から期末試験を行わず、それぞれの回の小テストやレポートの結果を総合的に評価しています。授業内容に関する教科書がありませんので、それぞれの授業時に印刷資料を配布するか、ELMS Moodle を用いてあらかじめ授業内容の提示を行い、予習や復習を行えるようにしています。資料は当日使用するスライド内容に加えて補足する内容になるように工夫している場合もあります。本授業は前述の通り高校を卒業したばかりの学生の受講も多いですし、文系の学生もいることから、内容は高校で学んだ知識でも理解できるように配慮し、今後それぞれの学生がどのような知識を修得すると理解できるようになる

かも含んだ内容となっています。

③ その他

エクセレント・ティーチャーズに選出されたのは、担当した 16 人全員の成果と、興味を持って学修してくれた学生のおかげだと思います。この場をお借りして御礼申し上げます。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・マリンバイオ資源についての知識を得られたこと
・どのような学科なのかわかった。
・外部講師の方から醤油が貰えた
・興味があったので面白かったです
・専門的な内容が聞けた点
・水産に興味を持てるような講義内容だった点
・色々な先生の話が聞けたこと。授業内容もそうだが、水産資源に対する様々な方向からの意見があって面白かった。
・水産生物と関わりのある産業についても学べた。
・オムニバス形式で様々な専門の先生方のお話を聞くことができたことです。
・自分の知らない分野について知識を増やすことができて、今後の学科選択につながるいい授業であったと思う。
・色々な先生のお話を聞けた点
・週によって先生が変わり新鮮さを持って臨むことができた。
・毎回講義を行う教員が異なる内容について様々があることを学べた。講義終了前のテストのおかげで復習の必要がない
・水産学部に進むにあたって必要となる「水産資源の利用」を、科学的な観点から身に付ける事が出来たこと。
・様々な研究室がどのようなことを行っているかを知ることができ、来年の学科選択をする際の判断材料となった。教授の方々の熱意がとても伝わってきて研究室に入るのが楽しみになりました。

社会の認識

「コンサルティング入門Ⅱ　発想転換の方法論」

メディア・コミュニケーション研究院　中川　理

■シラバス

授業の目標 Course Objectives

世の中の各種問題を解決をするコンサルタント的なものの考え方を習得することを目標とする。そのようなスキルはコンサルティングだけでなく、どの職種においても役立つものと想定される。原則として、コンサルティング業界や最新の企業の事例は取り上げない。あくまで思考訓練をするための講義である。

1 学期のコンサル入門Ⅰでは論理思考の訓練を行うのに対し、本講義では、常識に囚われない自由な柔軟発想ができるように訓練する。

到達目標 Course Goals

本講義の内容を十分に理解することで、以下のような知識と能力を高めることができる。

1. 水平思考、アイデア発想法
2. 合意形成の方法論
3. 交渉スキルの方法論
4. 問題解決の楽しみ方

授業計画 Course Schedule

本講義では以下のトピックを取り扱う。毎回、グループディスカッションに多くの時間を割き、その場その場で頭を使う訓練を繰り返す。

※毎回、グループディスカッションと発表を行うためのチーム編成をするため、遅刻しないで参加するようお願いします。

※講義の中でコンサルファームの外部講師の講演を 1、2 回実施する可能性を検討中（オンラインを想定）

- 論理思考
- 常識力
- 気づき力
- 合意形成
- 交渉術
- アイデア発想法
- 水平思考

成績評価の基準と方法 Grading System

- 成績評価は、授業回数の 7 割以上出席した者について、(1)2 回の個人課題レポート(60%)と、(2)クラス・ディスカッションへの参加、貢献の度合い(40%)を評価することによって行う。
- 出席は，毎回の講義終了後（講義翌日の金曜 18 時迄）に「他者評価メール」を中川にメール提出することで出席扱いとする。
- 試験は行わない。

■授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

本授業は、論理思考、アイデア発想法、合意形成方法、交渉術、マーケティングなどの領域を横断的に取り扱いながら、“常識”として漫然と受け入れてしまっている思考停止状態から如何にして脱却するか、人とのコミュニケーションの意義を最大化するにはどうすればいいか、などをアクティブ・ラーニング方式で学んでもらった。授業を通じて、論理的かつ柔軟に頭を使うことの楽しみや刺激を実感してもらいながら、関連する理論や問題解決方法と関連づけて解説し、学んだことを実践的に活用できるようになることを目指している。

② 授業実施上の取組・工夫

・知識伝達型ではなく考える力の養成

教科書や書籍に記載されている各種理論や知識を単に伝達するだけではなかなか身につかない。そのため、“解くべき問題”を各回の授業で提示し、その問題にどのように取り組むべきかをゼロから考えてもらったり、関連する理論や考え方をヒントとして付加しながら深く考察してもらうことを心がけた。

・学生起点からのテーマ設定

「勉強は退屈でつまらない」と思ってしまうと、学習する意欲や授業に参加する意欲が低下する。「役に立つから勉強する」、「楽しいから勉強する」ということを理解してもらうため、難しい理論でも学生が興味を持てるようなわかりやすいトピックに変換し、学生に問いかけたり、研修ゲーム方式で議論してもらったりすることを心がけた。

・インタラクティブ性

学生への問いかけや質問を受け付けるスタンス（質問した学生には加点するなど）を明確に打ち出し、インタラクティブ性を高めることを心がけた。メールで個別に受けた質問についても、クラス全体で共有すべきと判断したものは次回の授業で学生の名前入りで紹介し、授業に参加・貢献している実感を高めるようにした。また、Zoom の投票機能を活用し、アンケート質問に答えてもらった結果をその場で示すことで学生の参加意欲を高めるように努めた。

※なお、コンサルティング入門Ｉでは、提出してもらった個人課題を匿名にして Moodle にアップし、次の回の授業で学生に投票してもらい、上位者には発表してもらうこととし、評価の客観性とインタラクティブ性を高める試みも行っている。

・グループワークの重視

対面の場合もオンラインのライブ授業の場合も含め、ほとんどの授業で Zoom のブレークアウトセッションを活用してグループディスカッションをしてもらった。グループ毎にアウトプットを作成してもらい、それを発表してもらったり、優れたアウトプットを授業内で紹介したり、それぞれのグループのアウトプットの良い点と改善点を解説したりすることで、グループでの議論の意義を理解してもらうことを心掛けた。

・授業への貢献度評価の導入

この授業では、参加している学生がクラスにどのように貢献し価値を出したのか？という欧米流の授業貢献度評価を取り入れている。「授業全体を通じて、あなたの学習に最も役立った人」の名前と理由を毎回の授業後にメールで提出してもらい、出席確認と成績評価に活用している。学生と講師双方にとって煩雑で負担になるというデメリットもあるが、他者への貢献意識の向上、他者の優れた点から学び吸収するというスタンスの醸成、評価の客観性の担保など様々なメリットがある。また、このメールを提出する際に、学生が授業のコメントや質問をしてくることも多く、上述したインタラクティブ性の向上にも寄与している。

・新たなIT技術やIT環境の積極活用
　コロナ禍の鎮静化以降、対面授業を原則とする方針となっているが、この授業では多くの回を敢えてオンラインのライブ授業で行っている。学生が社会に出てからはオンラインでの議論や会議は極めて一般的であり、そのような環境に学生のうちから慣れておくことが重要である。また、レポート作成に関しても、生成AIを活用することを推奨している。IT環境や技術は絶えず変容していくものなので、問題点を意識しながらも優れた点を積極的に活用できる人材を育成する必要があると考えている。環境の変化にも臨機応変に対応し、グローバルで活躍できる人材になってもらうためにも、社会に出る前にそのような考え方や行動を習慣化して欲しいと考えている。
・絶えず授業の内容や運営方法の改善を心掛けること
　毎回の授業での学生の発言数や表情、空気感なども踏まえて、授業内容、説明方法、時間配分など、改善すべき点がないかを絶えず考えるようにしている。また、学生評価アンケートの結果も踏まえ、少しでも改善すべき点がないかを強く意識し翌年度に反映させている。

③ その他
　多くの学生はフィードバックとコミュニケーションに渇望している。そのため、学生からの質問には、授業内でも授業後のメールでもできる限り丁寧に対応することを心がけている。50人を超える履修者数なので、レポートの評価にはかなりの手間と時間がかかるが、できる限り詳細なコメントを個々人にフィードバックし、優れた点と改善できる点を具体例なども挙げながらフィードバックするようにしている。

■学生の自由意見（良かったと思う点）
・中川先生の熱意が伝わってくる、とても良い授業だったと思います。学生が自分自身の能力を向上することを後押しする姿勢が印象的でした。
・他者評価メールに先生が、詳細なコメントをくれること
・今まで受けてきた授業の中で一番質の高い授業だなと感じた。
・探究心を刺激するようなレポートが良かった
・学生の主体性が試される点
・コンサルティングとして必要な技能・知識であるという以上に社会人になる前に学んでおくべきことを知ることができた。
・他の人との話し合いを積極的に取り入れていて授業に参加しやすかった
・オンラインでの議論がはじめは違和感しかなかったが最終的に当たり前のようにできるようになった
・メールにとても丁寧に返信してくれたため、よく生徒を見てくれているんだと実感できる点。生徒の発言を丁寧に拾ってくれる点
・先生の熱量が伝わってきたこと。頭の使い方がわかったきがします。
・ひとりひとりの発言を受け入れ丁寧に返答していたこと。また、メール等で学生それぞれにフィードバックを送っていたこと。

体育学Ｂ 講義

教育学研究院　崎田　嘉寛

■シラバス

授業の目標 Course Objectives

本講義の内容は、2つのセクションに大別される。

【山仲担当】人私たちのカラダに備わった生物時計の仕組みを理解し、毎日を健康に過ごすために必要な正しい知識を習得する。特に、生活の基本となる睡眠、食事、運動を1日の中でどのように取り入れることが心身の健康の維持増進にとって重要かを理解し、今後の学生生活、さらに卒業後の社会生活のなかで健康的な生活をデザインし、実践できるようになることを目標とする。

【崎田担当】スポーツや人間の身体について人文社会科学的側面からアプローチし、現代におけるスポーツのあり方を幅広く理解する。

到達目標 Course Goals

【山仲担当】

(1)生体リズムを考慮した生活が心身の健康を維持するために重要であることを理解する。

(2)学生生活、卒業後の社会生活、子どもから高齢者まですべてのライフステージにおいて健康に生活するために何をすべきかを認識し、実践するための知識を習得する。

【崎田担当】

(1)スポーツの科学的・文化的価値に関する基礎的な知識を修得することができる。

(2)多様なスポーツのあり方について、自己の見解を示すことができる。

授業計画 Course Schedule

1. ガイダンス

【山仲担当】

2: 時間生物学とは何か

3: 生物時計の仕組みと生体リズム

4: 質のよい睡眠をとるために(1)メラトニンと光環境

5: 質のよい睡眠をとるために(2)体温調節の仕組み

6: 海外旅行と時差ボケ:時差ボケの仕組みと対策

7: 健康のために知っておきたい食習慣の正しい知識

8: 中間テスト

【崎田担当】

9: スポーツと文化(1)　学問としてのスポーツ

10: スポーツと文化(2)　スポーツにおける技術と戦術

11: スポーツと身体(1)　合理的な「からだ」の動かし方

12: スポーツと身体(2)　日本の伝統的身体技法

13: スポーツと社会(1)　教育としてのスポーツ／スポーツにおける倫理

14: スポーツと社会(2)　スポーツ科学と芸術／未来のスポーツのために

15: 筆記試験

＊2つのセクション順は入れ替わることがある。詳細は初回ガイダンスにて説明する。

成績評価の基準と方法 Grading System

成績評価は、ガイダンスを含め授業回数の7割(10 回)以上出席し、かつ期末試験を受験した者を対象として行う。授業への参加態度 40%、試験(レポート、小テストを含む)60%の重み配分に基づいて、到達目標の達成度を判定し評価する。なお、A+は特別の場合のみとする。なお、本授業は、2名の担当教員で実施する関係上、成績方法の詳細は担当教員のガイダンスで説明する。

■授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

体育学Ｂ（講義）は、各学期３コマ開講され、教育学研究院（健康教育論講座・身体教育論講座）所属の教員（６名）が原則として担当している。各授業は、専門分野・領域の異なる教員２名が担当する形式を採用し、この２名の教員の組み合わせは、毎年異なるペアになるように配置されている。なお、体育学Ｂ（講義）は、教員免許状取得に必要な科目（教育職員免許法施行規則 66 条の 6）でもある。

体育学 B（講義）では、１）身体に関わる個人や社会、歴史等の学問研究の成果に基づいた発展理論の理解、２）身体を通して能動的に人間と社会を分析・考察できるようになることを目指している。この目的を踏まえて、本授業は、山仲勇二郎先生（健康教育論講座）が担当する「生物時計・睡眠の仕組みおよび心身の健康」と、崎田（身体教育論講座・講義責任者）が担当する「スポーツと人間形成」で授業が構成された（授業の目標と内容は、シラバスに記載の通りである)。なお、以下では、崎田が担当した取組等についてのみ述べることをご了解いただきたい（山仲先生の取組等については、R2 エクセレント・ティーチャーズ報告書を参照ください)。

② 授業実施上の取組・工夫

「体育学」という講義名称から、多くの受講生は、中・高等学校での「保健」や「体育理論」のような授業を想定しているようである。そのため、ガイダンス等において体育学の体系と方法論を含む領域の特徴を丁寧に説明し、本授業の内容が体育学のどのような領域に位置づいているかを理解してもらうようにしている。このことで、学問としての体育を学ぶことが意識づけられていると考えられる。また、担当する授業では、スポーツや人間の身体に関する人文社会科学的内容を取り扱っているが、オリンピックやチームスポーツ（バスケットボールや野球)、コーチング・トレーニングといった受講生に身近な話題からアプローチすることで、最終的に「スポーツと人間形成」というテーマに落とし込むようにしている。加えて、本授業のテーマである「スポーツと人間形成」に近接できるよう、「これまでスポーツを通じた教育を“受けた側”から、スポーツを通じて教育を“する側”（親や地域指導者を含む）になること」を見据えて授業を展開している。すなわち、立場を変えて考えることで、体育やスポーツに対する多角的な見方や考え方ができるようになることを企図している。

また、本授業の到達目標である「スポーツの科学的・文化的価値に関する基礎的な理解を修得」するための工夫として、学術的知見の教授だけでなく、スポーツに関する映像やスポーツマンガ、スポーツ小説を活用することもある。もう一つの到達目標である「多様なスポ

ーツのあり方について、自己の見解を示す」ことができるための工夫としては、一部の授業で反転授業を取り入れ、授業内でのグループディスカッション（１グループ３～５名程度）を実施している。この際、明確な答えが定まっていない思考実験的な疑問を設定し、自分とは異なる意見に触れることで、自己の見解の精度をより高められるようにしている。また、グループディスカッションの内容を、クラス全体で共有する時間を設けている。ここでは、特定の受講生に議論の内容を発表してもらい、その発表内容に対して教員からさらに応答している。なお、以前は発表者に加点していたが、現在は成績に「加味する」程度に改善した。このことで、質の高い発表が増えたように感じる。加えて、小レポートを課し、議論の内容を言語化することで講義内容の定着化を図っている。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・ディスカッションは楽しかった。睡眠の講義も興味深かった
・睡眠や食事など、日常生活に応用できることを多く学べた点。
・前半：学生に積極的に考えさせる授業形式を取っていたこと。後半：睡眠に関する正しい知識を教示していたこと。
・オンデマンドで復習できることが良かった。
・前半は参加型の授業で、楽しく受けられたこと。後半では睡眠の推奨という特異な状態での授業でおもしろかったこと。
・これから自身が健康に生きていくための秘訣についてたくさん学ぶことができた点です。
・内容が先生の研究している具体的な話で面白かった。
・睡眠についてとても多くのことを学べた授業だった。大学生活で少し生活リズムが乱れていたので、今後の自分の生活を見直すきっかけとなった。講義もとても面白かった。
・ディスカッションや睡眠の質が高くなった
・後半の睡眠に関する話は生活に直結する内容だったので、聴くことができて良かった。
・いろいろな話を聞けたこと

ロシア語Ⅰ

メディア・コミュニケーション研究院　ブンティロフ　ゲオルギー

■シラバス

授業の目標 Course Objectives

この授業の目的は以下の通りです。

1. ロシア語の文法構造の基本的なメカニズムとルールを学び、

2. 読む、書く、聞く、話すの4技能の基礎を身につける。

3. 言語の学習を通じて、その背景にある文化に関する理解を深める。

到達目標 Course Goals

この授業で以下のことを修得します。

1. ロシア語の発音規則、文字の書き方を覚える。男性・中性・女性といった「性」のカテゴリー、単数・複数といった「数」のカテゴリー、主格、生格、対格、造格、前置格といった「格」のカテゴリー、名詞や形容詞の基本形態、ロシア語の 2 種類の基本動詞の形態、文と時制、いくつかの前置詞の用法を修得する。

2. 基礎的なレベルのロシア語で読める、書ける、聞ける、話せるようになる。

3. ロシア文化に関して基礎的な知識を得る。

授業計画 Course Schedule

1. ガイダンスとイントロダクション

2-7. 文字と発音 1。アクセントと母音の弱化。基本的な文。(第 1 課)

4-5. 文字と発音 2。硬音と軟音。硬音記号と軟音記号。基本文 2。(第 2 課)

6-7. 文字と発音 3。子音の同化。基本文 3。(第 3 課)

8-10 名詞の性と数。人称代名詞。所有代名詞。(第 4 課)

11-14. 指示代名詞。形容詞 1。第 1 変化動詞 1. 格。格変化。(第 5 課)

15-18. 形容詞 2。第 2 変化動詞 1。前置格。(第 6 課)

19-22. 動詞の過去形。生格と所有の表現。否定生格。(第 7 課)

23-26 第 1 変化動詞 2。対格。移動の動詞 1。不定人称文。(第 8 課)

27-30 動詞の未来形。与格。無人称文。(第 9 課)

成績評価の基準と方法 Grading System

単位修得には、授業回数の 70%以上の出席は条件となります。

成績評価は「学修成果の質」(到達目標の達成度)に応じて行います。授業参加度(授業への取り組み，小テスト，課題提出，発表等を含む平常点)50%，達成度を測る試験(統一試験)50%の成績を総合して評価します。

なお、単位取得には点数も、授業回数の 70%以上の出席が必要だと考えて下さい。

原則として総合点が 95-100 点のものを A+、90-94 点のものを A、85-89 点のものを A-、80-84 点のものを B+、75-79 点のものを B、70-74 点のものを B-、65-69 点のものを C+、60-64 点のものを C、50-59 点のものを D、0-49 点のものを D-、評価無のものを F とします。なお、この基準については，その都度必要な修正を加え，最終的な評価において，成績に極端な偏りが生じないよう十分配慮します。

■授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

「ロシア語 I」は全学教育の必修科目の一部として、初心者向けにアルファベット、発音、読み方などの基本的な内容から始まり、次第にロシア語の文法へと進んでいきます。この科目の目的は、紹介レベルのロシア語を習得し、基礎的な文法の理解を深めることです。ロシア語はスラブ語群に属し、日本語話者にとって多くの点で難易度が高い言語であることは事実ですが、「ロシア語Ⅱ」を含めて限られた時間の中で、簡単なロシア語の文章が読める、書ける、日常会話ができるようになることを目指します。

ロシア語の文法には、名詞や形容詞の格変化、動詞の時制や人称変化があり、文法ルールが多く、かつ例外も少なくありませんが、まずは簡単で理解しやすいところからスタートします。日本語や英語との比較を通じて、文字、発音、読み方、語順、そして基礎的な文法を学んでいきます。

② 授業実施上の取組・工夫

- 履修者数に応じて授業の進行方法を柔軟に変更しています。今回のクラスは 50 名以上だったため、それぞれのテーマに関連する資料を一つのファイルにまとめ、オリエンテーション時に配布するようにしました。
- 大人数のクラスでも、履修者全員の名前を覚えるよう努め、学生とのコミュニケーションでは、優しくポジティブな態度で対応し、一人ひとりのニーズに応じた説明方法や質問方法（口頭でも、ネット上で匿名でも）を考えることが大切だと思います。
- 全学教育のアンケートとは別に、自分自身で学生からフィードバックを収集し、可能な限り履修者の希望に応えるようにしています。毎年、グループごとに希望が異なるため、授業全体の改善にとって欠かせない作業だと思います。
- 課題練習ではペアワークやグループワークを行い、毎回同じペアにならないように、時々ペアやグループをシャッフルすることが効果的だと考えています。
- 主に文法を教える授業ですが、大人数のクラスでも一人ひとりに発言の機会を与えることが重要だと思います。
- 教科書に加えて、自作の教材（単語リスト、文法まとめ表など）を数年間使用しており、毎年内容を編集・追加しています。
- 文法で疲れた学生が少しリフレッシュできるよう、授業の進行に合わせてロシア文化や、日本に住む外国人としての自身の経験について話したり、ミームや言葉遊びを紹介したりしています。
- 言葉の語根や語形成、言語の歴史に関する話を交えることで、文法の例外についても納得してもらいやすくなるようです。
- ロシア語のネイティブスピーカーであることを活かし、発音やイントネーションについて補足説明をしたり、学生が文書を読む際に発音指導を行ったりしています。

③ その他

履修者数が多かった一方で、ロシア語を第 1 希望として選んでいない学生がかなり多かったです。最初の授業の自己紹介で「ロシア語を勉強しようとしたきっかけ」について「実はスペ

イン語を勉強したくてロシア語になってしまい、落ち込んでいます」、「ロシア語にあまり興味がなかったです」といったコメントが多く見受けられ、学生のモチベーションが最初は低かったと思います。そのため、学生による評価に対してはあまり期待していませんでした。しかし、もしかしたら、教員自身が楽しんで授業を進める姿を見て、学生たちもロシア語を学びたいと思うようになったのかもしれません。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・質問に対して詳しく説明してくださり、非常に満足のいくものだった。説明がとても分かりやすく、理解しやすかった。
・担当教員の説明がとても分かりやすかった。授業を受講している生徒一人ひとりに目を配り、全員が理解できているかなどをしっかりと確認していた。授業全体の雰囲気が柔らかく、過度に受講生に負担をかけたり怖がらせたりすることがない。授業の内容自体は難しいが、担当教員が積極的に受講生とコミュニケーションをとり、全面的に寄り添う姿勢で授業に臨んでいるので、一受講生としてやる気が湧いた。とても面白い授業だった。
・まず先生が生徒の顔と名前を覚えてくださっていたことが嬉しくてとてもやる気になりました。発音の仕方を動画を用いて詳しく説明してくださったり、生徒の質問に対して丁寧に解説してくださったのでロシア語に苦手意識を持つことなく楽しく学習できました。ロシア語を伝えたいという熱意が伝わってくるような授業でしたので毎回楽しみにしていました。ありがとうございます。
・先生が一人一人の生徒の名前を憶えていてくれたことに感動しました。授業も日本人にも分かるように丁寧に行ってくれて、毎回とてもためになる授業だったと思います。
・ネイティブの先生の授業だったために、先生自体がとても良い教材になっていて勉強しやすかった多くの教材を用意してくれて取り組みやすかった
・ペアで問題に取り組むことで、確認しながら進められた。
・ロシア語初心者の生徒たち1人1人に対して丁寧に教えてくださったこと。
・質問対応が分かりやすかったです！発音についても教えてくださり理解が深まりました
・質問一つ一つに丁寧に対応してくれたので聞きやすかったし、生徒を置いてきぼりにしないように気にかけてくれていたので学習しやすい環境だった。生徒をまとめて認識するのではなく個人個人とのコミュニケーションを大切にしてくれていたのでこちらもそれに応えようという気になった。説明もわかりやすく日本語で説明しながらも、ネイティブの発音を近くで聞けたので非常に良かった。
・一課ずつ丁寧に教えてもらえたので、授業に安心してついて行けた。ネイティブの発音を毎回生で聞くことができたので、正しい発音で話す勇気が出た。初のロシア語学習が先生の授業で本当によかったです！！ありがとうございました。

英語演習

「中級：英語で学ぶ論理学とその歴史」

文学研究院　佐野　勝彦

■シラバス

授業の目標 Course Objectives

論理学やその歴史に関する英語文献を精読することを通じて、要点を押さえつつ正確に英語文献を読む能力を養う。講義の中では基本的な専門用語についても解説をし、論理学の基礎知識についての英語による課題演習も行う。

到達目標 Course Goals

1) アカデミックな英文の内容を、要点を押さえつつ手際よくまとめる能力を身に付ける。

2) 課題演習を通して論理学の専門用語について正確な知識を得る。

3) 正しい証明がどのようなものかについて理解を深める。

授業計画 Course Schedule

毎週一定数の担当者を決めて課題テキストを輪読する予定である。

第 1 回目 ガイダンス

第 2 回目から第 14 回目 課題テキストの輪読とそれに関する議論

第 15 回目 総括

成績評価の基準と方法 Grading System

指定された分担範囲の発表、および、定期的に課される課題の累計成績(80%)と、授業での議論への貢献(20%)による。なお、課題の提出には一定以上の出席回数を求める場合がある。

■授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

授業の到達目標は、(1) アカデミックな英文の内容を、要点を押さえつつ手際よくまとめる能力を身につけること、(2) 課題演習を通じて論理学の専門用語について正確な知識を得ること、(3) 正しい証明とはどのようなものかについて理解を深めること、の三点です。授業ではまず、論理学の基礎知識に関する英語資料を用いた課題演習を行い、その後、論理学やその歴史に関する英語文献を精読することで、要点を押さえつつ正確に英語文献を読む力を養うことを目指しています。全 15 回の授業のうち、およそ 8〜9 回を英語資料による、論理学の課題演習にあて、残りの回では、論理学およびその歴史に関する英語文献の輪読を行っています。文献輪読の際には、前半で学んだ論理学の知識が文献の中でどのように説明されているかに注目しながら解説を行っています。

② 授業実施上の取組・工夫

（授業内容の理解）学生の多くは、それまでに論理学を学んだ経験がほとんどありません。そのため、本授業では、高校数学で扱われる証明のスキルや知識（集合や論理に関する内容、オ

イラー図・ヴェン図など）と、論理学の基礎概念とを適切に接続できるよう配慮しています。数学が得意でない学生も一定数いますが、論理学には、基本的な課題に手を動かしながら取り組むことで、徐々に理解が深まっていくという特性があります。こうした特性を活かし、課題演習を授業の中心に据えています。板書は基本的に英語で行い、必要に応じて専門用語の日本語訳も説明しています。授業では黒板を用いず、iPad による手書きノート（Goodnotes を使用）をプロジェクターで投影して板書の代わりにしています。授業後には、そのノートを PDF 化して ELMS 上に共有することで、学生が復習しやすい環境を整えています。また、授業内に演習時間を設け、学生が問題に取り組んでいる間は教室内を巡回し、理解が進んでいない様子の学生にはこちらから声をかけて適宜サポートを行っています。授業前半で扱う論理学の課題演習では、毎回 1 週間の提出期限を設けた課題を出しています。学生には、授業中の板書の書き方を参考にしながら、英語で答案を手書きしてもらい、スキャンした PDF を ELMS 経由で提出してもらっています。提出された課題は次週までに採点して返却していますが、学生に課題を提出してもらった直後の授業冒頭で解説とフィードバックを丁寧に行うようにしています。最後に、英語文献の輪読では「not always」という表現が「すべてのものが述語 P をみたす」の否定に該当していることを説明したり、文献内の簡単な論証を、論理記号を使って形式化し妥当性をチェックしてもらうといった課題を課して、前半部分と後半部分の内容を接続するように留意しています。

（学生参加の促進）授業に積極的に参加してくれる学生には、平常点を加点することで動機づけを行っています。特に、英語資料を用いて論理学の基礎概念を解説する場面では、可能な限り学生に問いかけを行い、発言してくれた学生には平常点を与えています。また、ELMS を通じて答案を返却するようになってから、対面時と比べて学生の名前を覚えにくくなっているため、授業中のやりとりを通じて名前を積極的に覚えるよう努めています（自分自身のボケ防止にもなります）。さらに、私の書き間違いを指摘してくれた学生にも、授業への貢献として平常点を加点しています。加えて、授業後に新たに生じた疑問や、授業中に手を挙げて発言することに抵抗がある学生からの意見も丁寧にすくい上げるために、ELMS 上でレスポンスシートを設定し、期限を設けて回答してもらう仕組みも取り入れています。これにより、対面でのやりとりだけでは把握しきれない学習状況や理解度の把握にも努めています。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・毎回課される宿題が適切であった。
・今まで曖昧な知識しかなかった論理学という学問について少し詳しくなることができた。
・先生が優しい。
・すごく楽しかったです
・論理学について学ぶことができ、数学力が上がったと感じた。説明もわかりやすく，楽しい授業だった。
・記号で書かれた命題を実生活での具体例に落として説明してくださったので、よく理解できました。
・初出の考え方や課題などの解説が丁寧だった点。
・論理学についての説明がわかりやすく、初めてでもついていけた。
・純粋に、論理学を用いて物事の正しさを判断する事が面白かった。また、時々認知バイアスの話などもしてくれたので、興味を保ったまま授業を受ける事ができた。
・数学や日常でなんとなく用いていた考え方を言語化するのが楽しかった

・質問対応が丁寧な点、授業資料などを隅々まで上げてくれた点
・英語と同時に論理学を学ぶことで相乗的な効果があった点。
・論理学の計算について自分で手を動かしてできたこと。
・授業の進むスピードは簡単なところは速く進み、難しいところや重要な点は繰り返し説明したり、理解しているかを確認したりされていて、とても受けやすい授業であった。課題の内容も難しすぎず、授業の内容を理解していれば楽しく解けるような内容であったのでとてもよかった。あとは先生が関西弁なのもあってか親近感のある雰囲気で、ほのぼの授業を受けられたのでとても満足でした。
・論理学の基本を英語で学ぶことができてよかった
・「論理学英語」としての授業であるのにもかかわらず、英語がかなり苦手な自分でも議論に参加しやすかった。それは「論理学」においての議論の進め方が記号化されており、万国共通な思考ができるからであるということに気づいた。言語の壁を乗り越えて考えていくことがより一層大事になると思われる将来においてとても良い経験になったと思う。

日本語Ⅱ

「上級表現（プレゼンテーション）」

高等教育推進機構　近藤　弘

■シラバス

授業の目標 Course Objectives

主に学術的な場面でのプレゼンテーションの内容の深まりとスキルの向上を目指す。

到達目標 Course Goals

1授業：大学の授業で講師の話を聞いて、自分の意見を述べることができる。また、ディスカッションを通して他の受講生と意見交換することができる。

2ゼミ：自分の研究について、進捗状況や構想等、明確で詳しく伝えるプレゼンテーションを行うことができる。また、ゼミ生とのディスカッションを通して自身の意見を深めることができる。

3学会：自分の研究内容についてデータなどを示しながら、明確で構造を持った 15 分程度のプレゼンテーションができる。また、質問に対して柔軟に対応することができる。

授業計画 Course Schedule

この授業は学内外でのプレゼンテーションを日本語で円滑に行うための授業である。授業は大きく次の5つのパートに分けて進める。

■テーマの導入

■プレゼンテーションの基礎

■話すための練習と学術場面での日本語

■個別練習

■プレゼンテーション

成績評価の基準と方法 Grading System

1 参加度 40%（課題提出、自己評価等）

2 プレゼンテーション 60%（初回 20%、2 回目 20%、最終 20%）

■授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

1.1　目的

この授業は主に留学生を対象としています。授業の目的は受講生が学術的な場面（ゼミ、授業、学会）でプレゼンテーションを行うための姿勢、能力、日本語運用能力を育むことです。また、協働学習を通して背景が異なる他者と学び合う姿勢を育むことも目的としています。

1.2　内容

授業ではペアワーク及びグループワークを中心に、主に以下の活動に取り組みます。

■　ゼミでの自己紹介：興味・関心が近しい学生をグルーピングし、仮想ゼミを設定する。実際の自己紹介例を参考に各自が PPT を作成し、ゼミ内で発表する。

- レジュメを使って発表する：まず、レジュメの作り方について学ぶ。次に、ペアで興味・関心がある学術書か論文を選ぶ。次に、選んだ学術書の一部もしくは論文についてのレジュメを作成する。最後にリハーサルをした上で実際にレジュメを使って発表する。
- 学会発表を想定したプレゼンテーション：まず、興味・関心が近しい学生をグルーピングする。次に、グループで調査のテーマを設定し、発表してみたい学会を探す。次に、調査を計画・実施し、得られたデータを分析する。実際の学術的なプレゼンテーションを参考に PPT を作成する。最後にリハーサルを行なった上で、調査結果について、学会発表を想定したプレゼンテーションを行う。

② 授業実施上の取組・工夫

2.1.　グループワークの仲介

ペア・グループワーク中は、私も学生のディスカッションや雑談に参加したり、合意形成の仲介を試みたりしています。雑談を通して、学生同士、また私と学生との関係性もある程度構築され、学期が進むにつれてディスカッションが活発になっていく気がします。

2.2.　リハーサルとブラッシュアップ

プレゼンテーション本番の前に必ずリハーサルを行い、グループ内でその感想を話し合い、ブラッシュアップする時間を設けています。リハーサルを通して自分達の発表の過不足や良いところに気がついてくれたらいいなと思っています。

2.3.　ルーブリック評価とフィードバック

活動本番前に必ずルーブリック（観点別の評価表）を共有し、どのような観点で何を評価するのかについて説明するようにしています。活動本番後は学生にもルーブリックで自己評価をしてもらいます。なお、成果物の提出や評価は基本的に Google Classroom で行っています。下書きの段階から成果物を提出してもらい、特に話す内容についてフィードバックするようにしています。

2.4.　多様な学生の協働作業

日本語の授業には、様々な国・地域の学部生、研究生、大学院生、交換留学生、そして教員の方々が参加してくれます。それぞれの活動では、なるべく立場が違う人たちでグルーピングするようにしています。受講生同士が、知っていること・知らないこと、得意なこと・不得意なことを補完し合いながら、目標に向かう過程を楽しんでくれたらいいなと思っています。

③ その他

留学生は外国人として日本で生活しており、外国の生活では孤独を感じやすいものです。受講生には、授業内の関わりを通して、教室を１つの居場所のように感じてもらえたられたらいいなと思っています。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・内容が実用的で、先生が親切です
・近藤先生の教え方が面白くて易しかったです
・話しやすい雰囲気があって、楽に発表しました
・よくなかったものはない
・アカデミックな場面でプレゼンテーションをするのは良いと思います。

・先生が非常に優しくて、質問を気軽に聞けました。
・先生がすごく分かりやすい指導してくださったことが印象的でした。フィードバックがすごく勉強の刺激になりました。
・グーグルフォームに記入しました！ありがとうございました！